

史料紹介と研究

東京大学史料編纂所所蔵「松平乗全関係文書」中の画像史料

荒木 裕行

はじめに

本稿では、東京大学史料編纂所所蔵「松平乗全関係文書」（貴重書…特殊蒐書）に含まれる画像史料を紹介する。松平乗全は、寛政六年（一七九五）生、明治三年（一八七〇）没の三河西尾藩主であり、弘化二年（一八四五）から安政二年（一八五五）までと、安政五年から万延元年（一八六〇）までの二回、老中を勤めた。最初の老中在任中には南紀派に属して徳川斉昭と対立したことなどで知られる。

「松平乗全関係文書」には、嘉永三年（一八五〇）に所司代引渡のために上京し、京都・大坂など上方地域を巡見した際に作成された書類や、蝦夷地・松前藩に関わる書類など、主に乗全の老中在職中に作成された史料が含まれる。本史料群に含まれる、江戸吉原の名主による江戸町方の風聞探索書や徒目付などによる諸大名の動静に関する風聞探索書などを用いた研究が行われてきた⁽¹⁾。

本史料群には、上方地域巡見時に作成されたものや江戸での儀礼参加に関するもの、蝦夷地情報の報告のために作成されたものなど、複数の絵図が含まれており、以下では絵図の画像を紹介するとともに簡単な説明を付していききたい。なお、掲載・撮影の都合上、掲載画像のいくつかについては、トリミングを行ったもの、一部分のみの掲載のものがある。また、請求記号は「松平乗全関係文書―松平乗全―番号」となるが、末尾の当該番号のみを史料名後の（ ）内に示した。

○上方巡見関係

【図1～図12】までは、乗全が嘉永三年に上方地域を巡見した際に作成された絵図類である。乗全は、内藤信親の所司代就任にともなう所司代引渡のため、十一月五日に上京した。同月十五・十六日に参内、その後二十日に大坂、二十四日に奈良を訪れ、十二月下旬に帰府している⁽²⁾。「松平乗全関係文書」には、京都・大坂滞在中に京都町奉行・堺奉行・大坂金奉行などから差し出されたと考えられる書付類、巡見に利用したと考えられる絵図類が残される。

【図1】「大坂より遠見八方絵図」（86） 四八・五cm×五一・七cm

大坂を中心とした摂津・河内・和泉国地域の絵図。高槻・尼崎・西宮・兵庫・堺・岸和田・狭山といった都市は、大まかな場所が記されているだけである。大坂周辺を取り巻く山々は細かく名前が記されており、また江戸や西国・四国・中国への航路についても方向が記入されるなど、大坂周辺の地理に不案内な乗全に、およその地理を説明するための絵図と言える。形状から考えると、高所から眺望することを想定している可能性もある。

【図2】「御金蔵御囲内絵図」（94） 三二・〇cm×四三・九cm

大坂城の金蔵の図面。新金蔵の内部東側には、「御老中」と記された張り紙が附されており、乗全が実際に金蔵内部に入る際の着席場所を示している⁽³⁾と推測できる。

【図3】（巻頭図版）「川崎御蔵絵図」（95） 三六・五cm×七七・五cm

天満川崎の淀川沿いにあった幕府の川崎蔵の絵図。「松平乗全関係文書」中には、大坂破損奉行の差し出した「川崎御材木蔵有物高帳」があり、それと関係するものと思われる⁽⁴⁾。

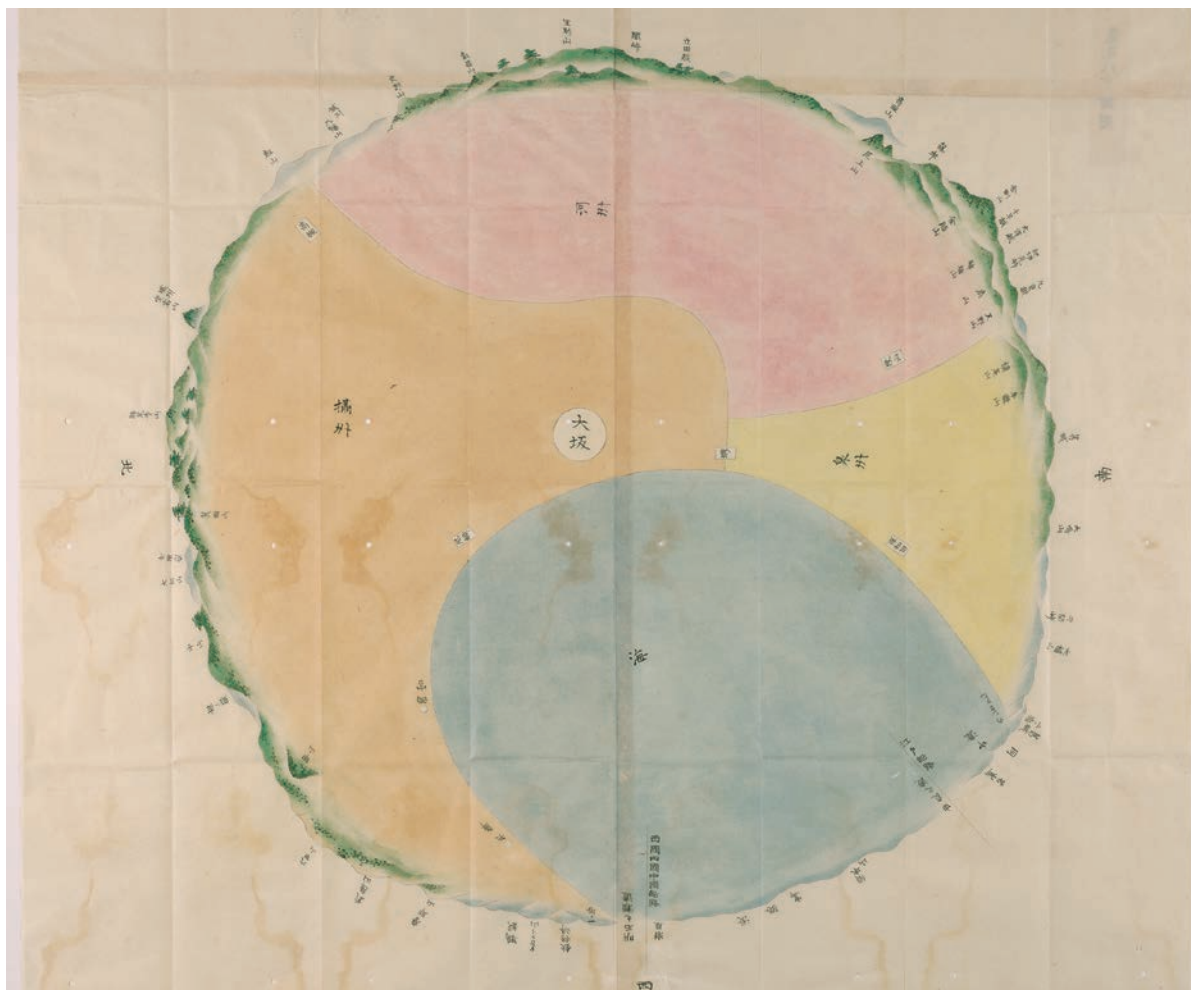


図1 「大坂より遠見八方絵図」(部分)

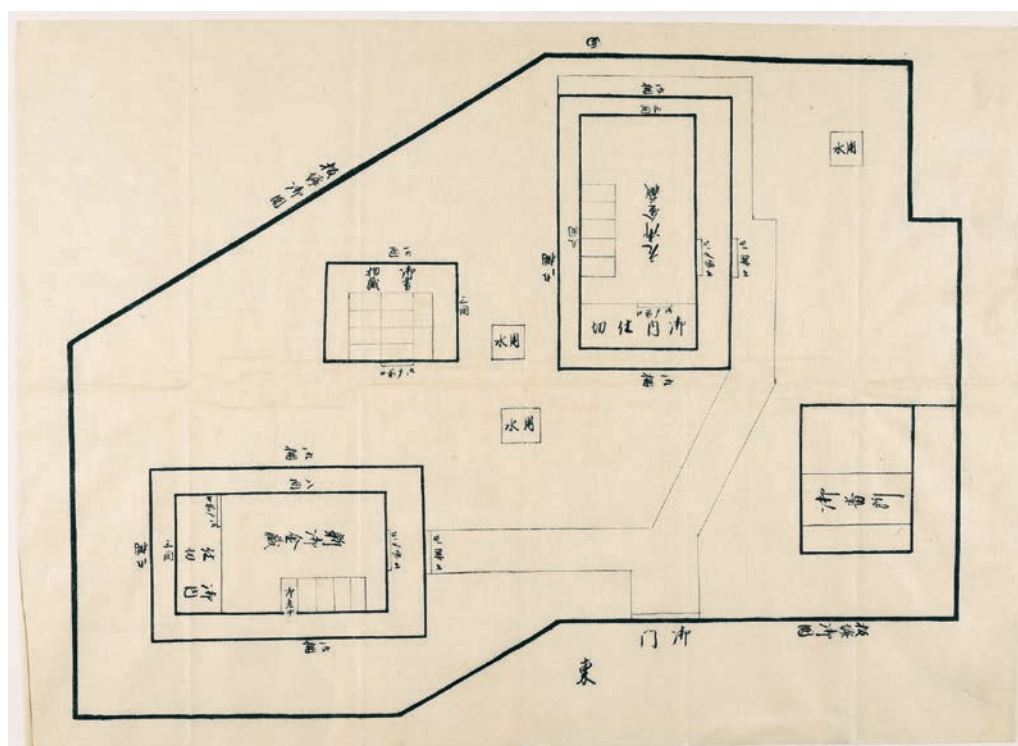


図2 「御金蔵御囲内絵図」

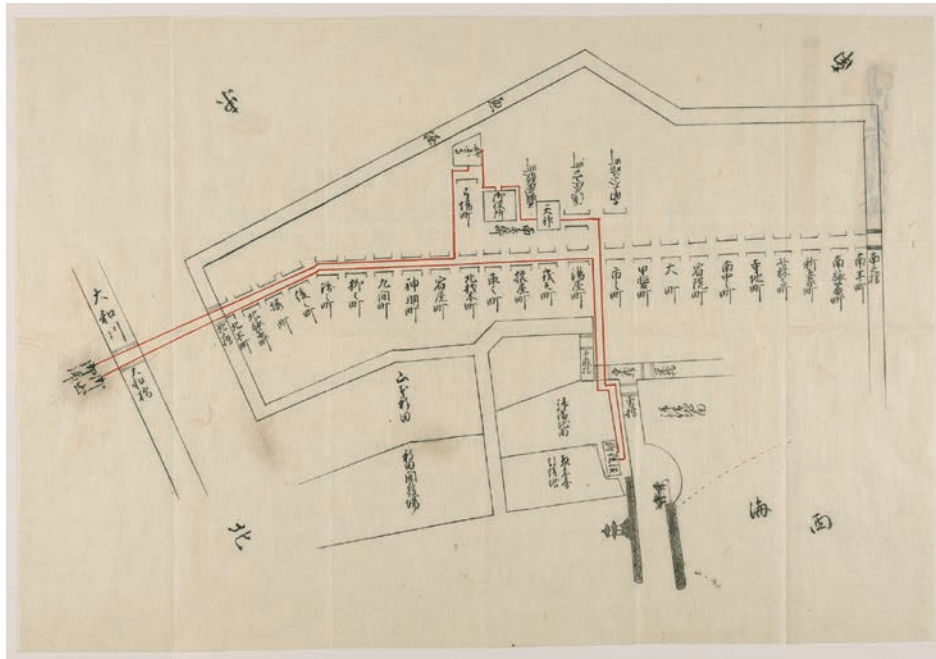


図4 「堺御見分所絵図」

【図4】「堺御見分所絵図」(98) 二六・六cm×三九・〇cm

「堺御見分所絵図」(103) 二六・六cm×三八・八cm

乗全の堺巡見の準備のために作成されたと推定される絵図。巡見ルートが朱で示される。ルートは大和橋で大和川を渡り、北之橋から堺の市中に入る。その後、中心部を通過して、妙国寺を経由して、堺町奉行所に到着。天神を経由して、港の近在にあった浜役所まで行った後、市中心部を通過して、北之橋から市外へ出るというもの。

なお、両図は大きさもほとんど同じで、内容も一致しており、同時に作成されたものと考えられる。

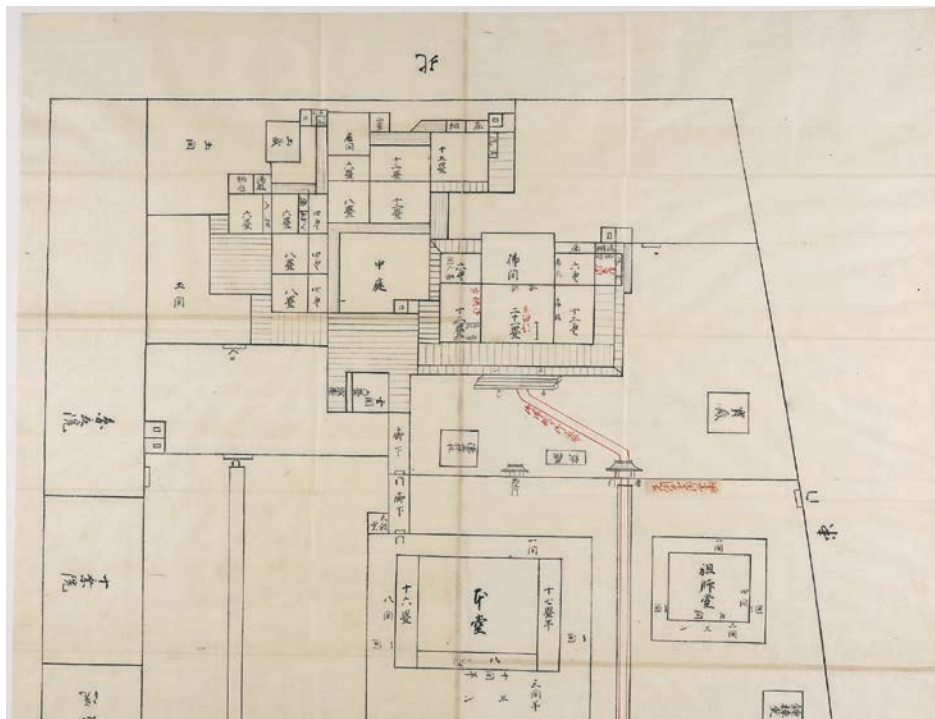


図5 「堺御本陣絵図」(部分)

「堺御本陣絵図」(100) 七三・三cm×五四・三cm

【図5】「堺御本陣絵図」(105) 七五・五cm×五二・七cm

堺の妙国寺の絵図。妙国寺内での乗全の移動経路や着座位置などが朱で示されている。両図は、ほぼ同じ内容であり、同時に作成されたと考えられるが、【図5】には乗全だけでなく、供の着座位置についても記されており、若干の違いがある。

【図6】「堺町絵図」(106)

一三二・〇cm×九七・〇cm

堺の全体図。「御朱印寺社」が朱色、「寺」が緑色、「町役寺」が薄茶色、「御役屋敷」が灰色、「武士屋敷」が青色、「町中道」が黄色、「川堀地海」が薄青色、「請地并御預地拝借地面」が桃色と塗り分けられている。大山古墳・長山古墳・長塚古墳・田出井山古墳といった古墳が描かれているが、これは堺を描く地図類の一般的な様式である。

【図7】「西丸御蔵絵図」(110)

三二・三cm×四四・五cm

【図7】「西丸御蔵絵図」は、「西丸・玉造・難波御蔵絵図 三枚 御春屋絵図 老枚」と記された同一の包紙に包まれている。本図は大坂城西丸の蔵の配置を描いた図面。全二五棟のそれぞれについて、蔵の大きさ、管理役職名および戸前(入口の戸)ごとの名称が記されている。

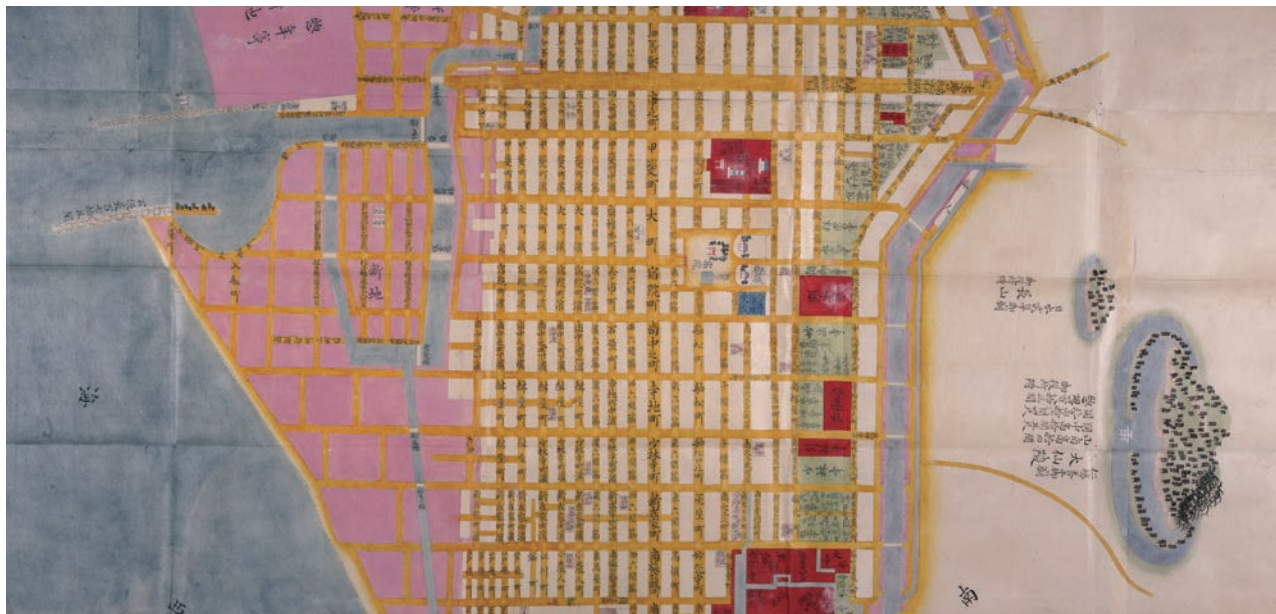


図6 「堺町絵図」(部分)

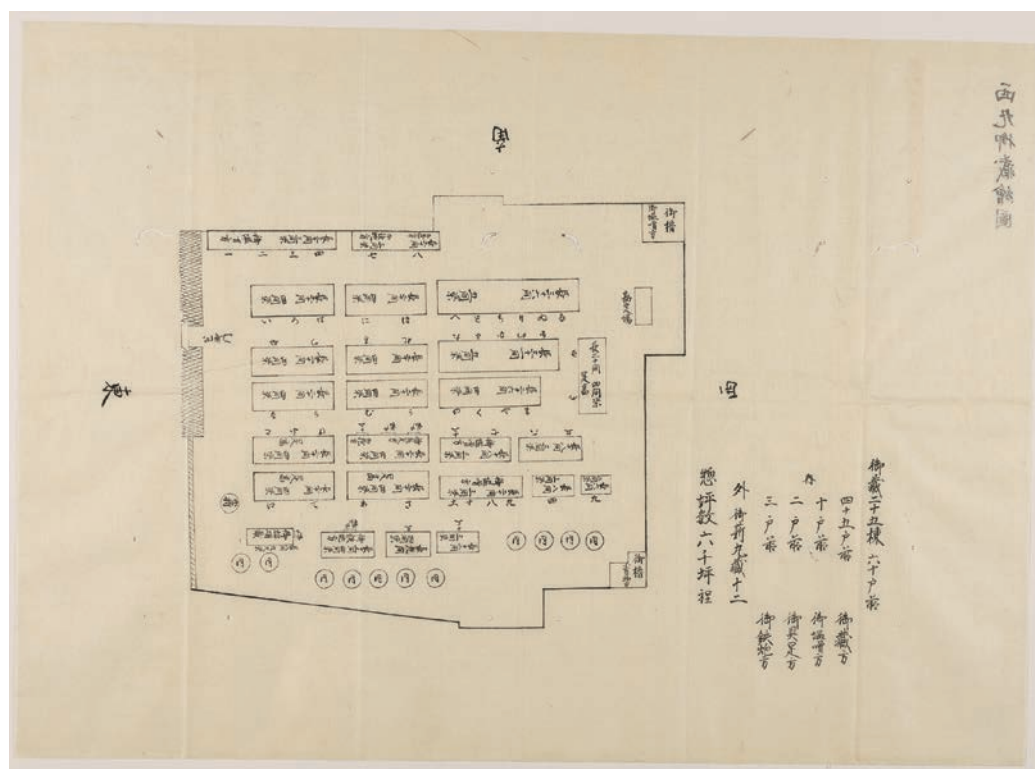


図7 「西丸御蔵絵図」

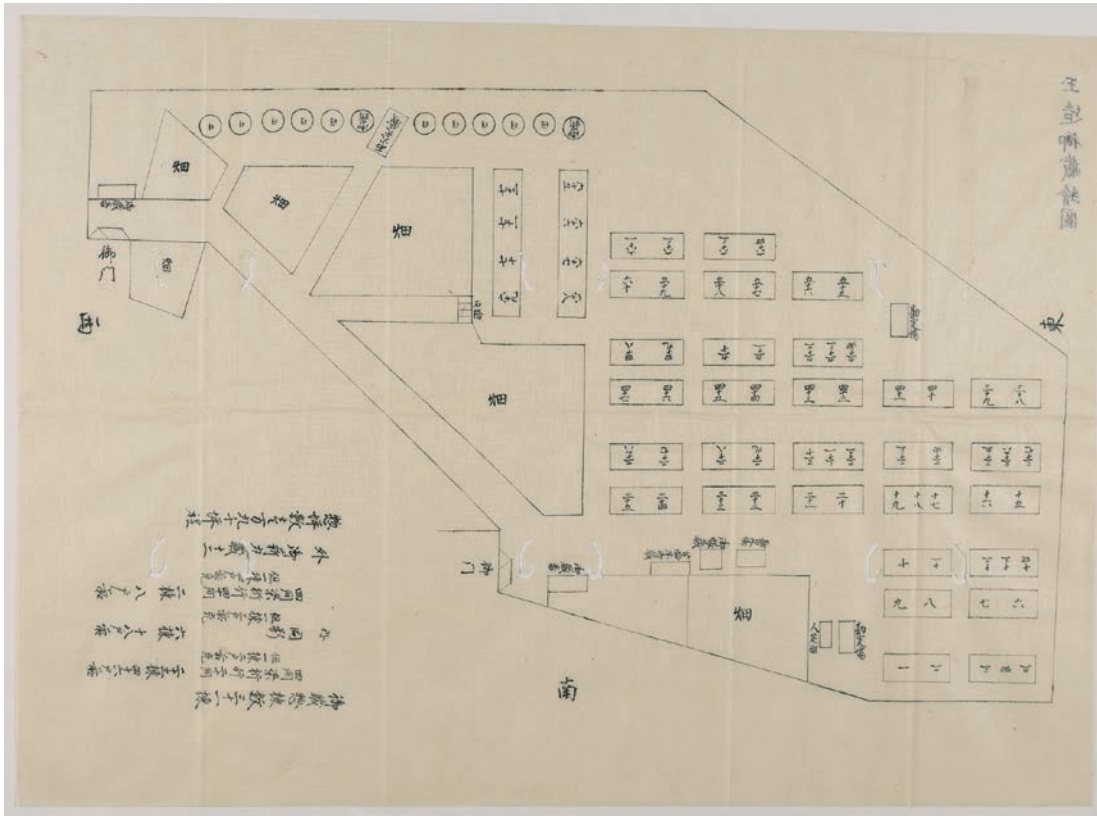


図8 「玉造御蔵絵図」

【図8】「玉造御蔵絵図」(11) 三二・〇cm×四四・五cm
大坂城内の北東部にあった玉造蔵の図面。全三一棟の蔵それぞれの戸前の番号が記される。

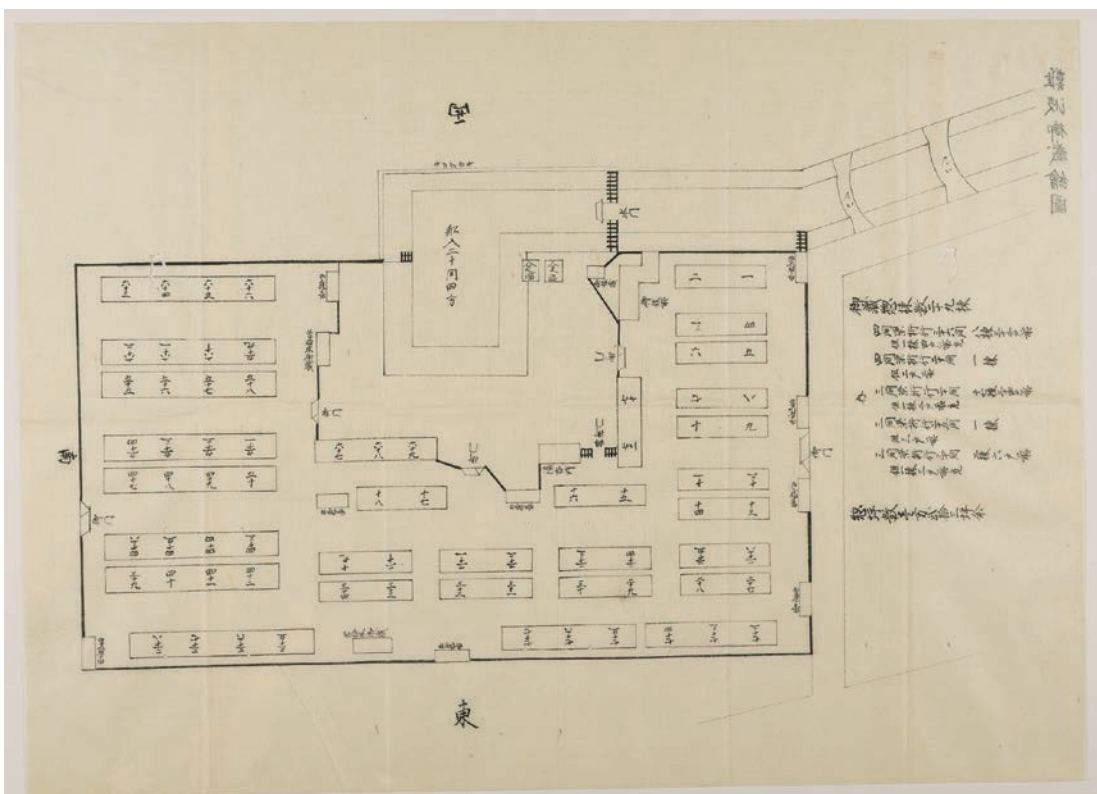


図9 「難波御蔵絵図」

【図9】「難波御蔵絵図」(11) 三二・三cm×四四・五cm
大坂城から南西にあたる難波村にあった難波蔵の図面。全二九棟の蔵それぞれの戸前の番号が記される。

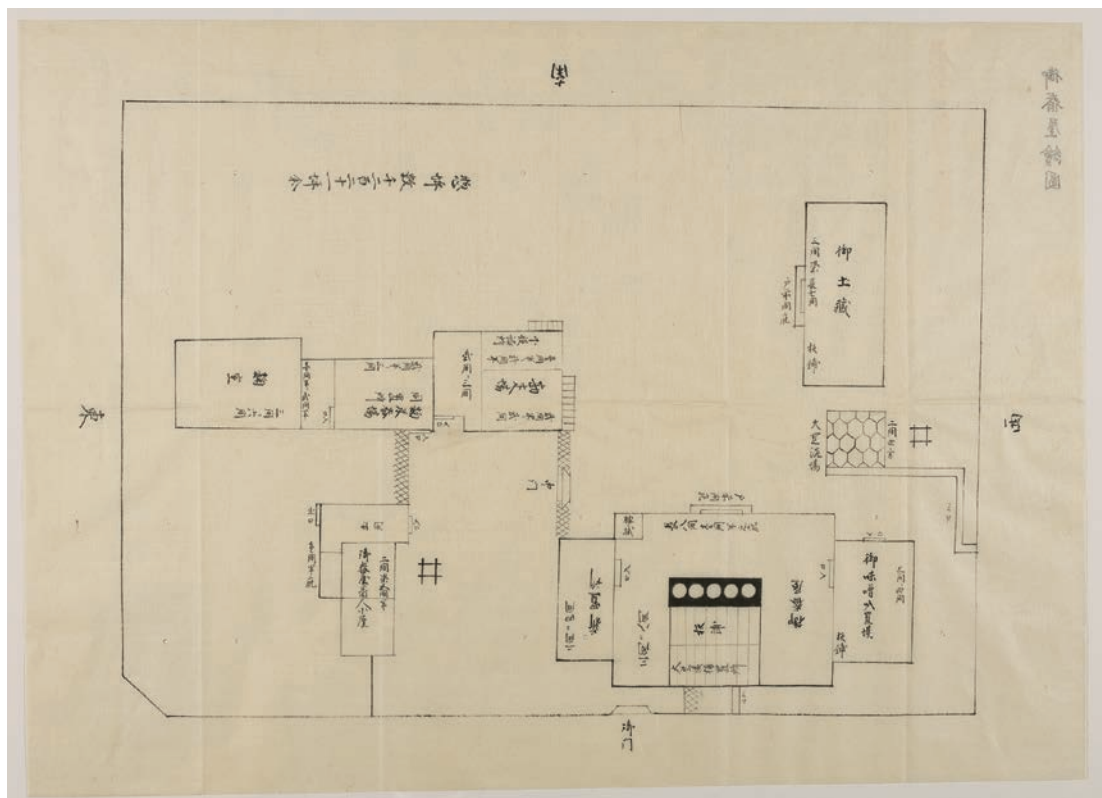


図10 「御春屋絵図」

【図10】「御春屋絵図」(113) 三二・三 cm×四四・七 cm
大坂城外西側の弓町にあった御春屋の図面。建物それぞれの大きさなどが記される。

○蝦夷地関係

乗全は松前藩とつながりを持ち、ペリーの函館来航時などには松前藩へ私的な指示を行っていた⁽⁵⁾。本史料群中には、それに関係する絵図などが残されている。

【図11】「箱館麓絵図」(161) 二七・九 cm×四〇・五 cm

渡島半島南端部を描いた絵図。西は松前から、東は恵山岬(絵図中では「エサン崎」と表記)が含まれる。矢越岬や白神岬が極端に突き出しているように描かれるなど、実際の地形を大きくデフォルメしている。箱館の東に位置する汐首と、箱館直近の立待・山背泊に台場と遠見番所が設置されていることが示される。

【図12】「箱館絵図」(383) 六一・三 cm×五五・〇 cm

函館周辺の地図。山や川の名称、地名、村名が記されるとともに、各地域間の街道に沿った距離が記入される。包紙には「伊豆守家来差出候箱館絵図一枚」とあり、松前藩から差し出されたものであるとわかる。函館北方の中野(現在の北海道亀田郡七飯町中野か)やコマサラエ野は外周の距離も記されているが、目的は不明。

【図13】「ペリー入港時の箱館港図」(162) 二八・二 cm×五七・三 cm

嘉永七年(一八五四)に二度目の日本来航時にペリー艦隊が函館へ渡来した際の様子を描いた絵図。この時のペリー艦隊は二群に分かれて函館に向かい、まず四月十五日にマセドニアン号・ヴァンダリア号・サザンプトン号(三本マストの帆走船)が函館に到着し、同月廿一日に旗艦ボーハタン号とミシシッピー号(蒸気船)が入港した⁽⁶⁾。先着の三艘は十六日から函館湾の測量を開始し、十七日からは函館港内に停泊して測量を行った。本図で描かれるのは三艘の帆走船が港内に停泊している状況であることから、十七日から二十日の間に作成されたものであることがわかる。



図 11 「箱館鹿絵図」



図 14 「蝦夷地・北蝦夷地・クナシリ・エトロフ地図」



図 13 「ペリー入港時の箱館港図」

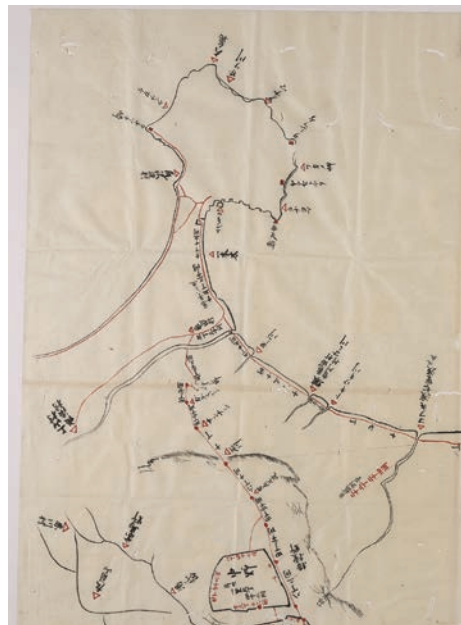


図 12 「箱館絵図」(部分)

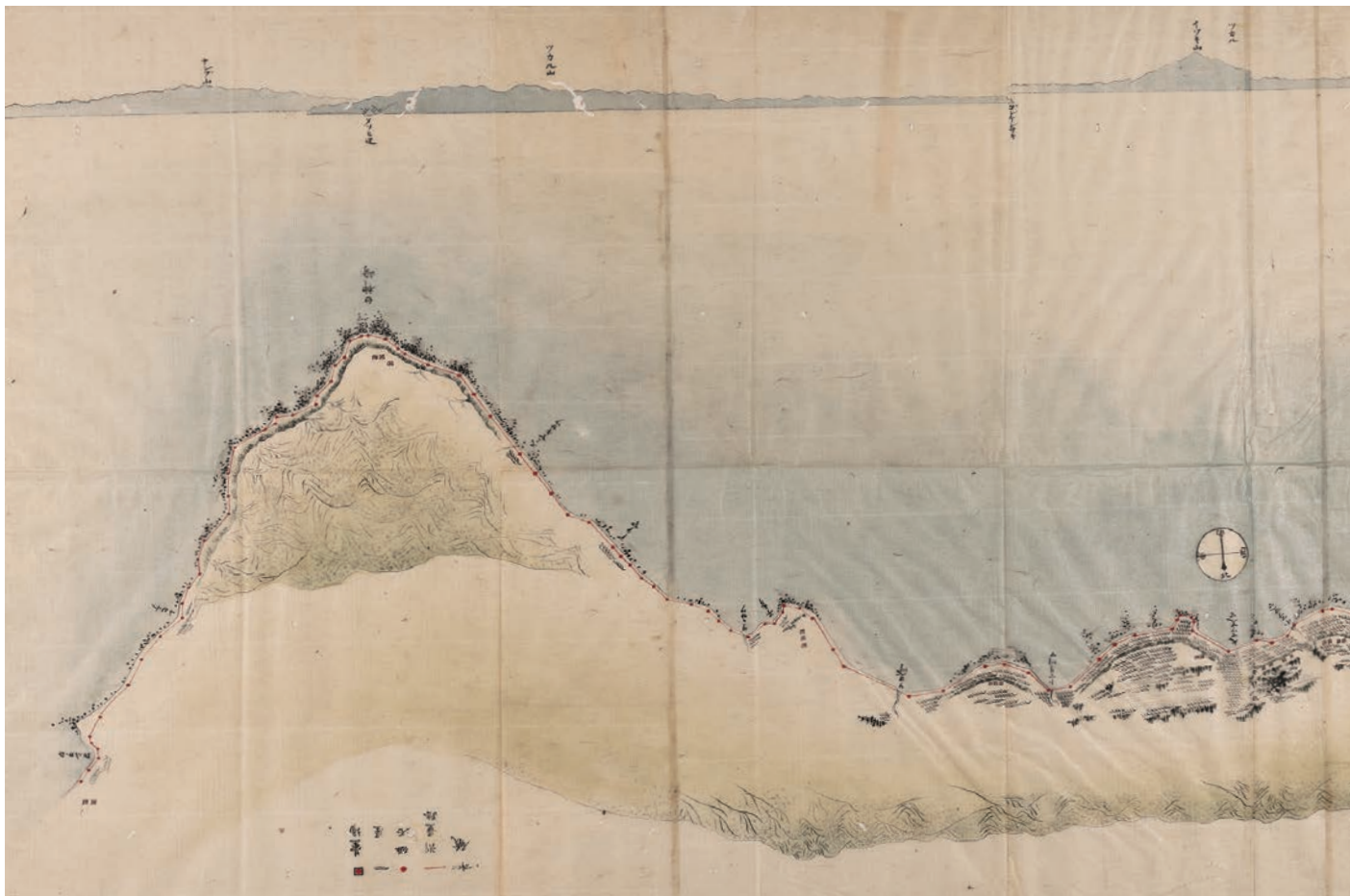


図 15 「福山城辺図」

【図14】「蝦夷地・北蝦夷地・クナシリ・エトロフ地図」(182)

四〇・九cm×二八・七cm

北海道島・樺太島南部・択捉島・国後島・色丹島・蘭舞諸島・礼文島・利尻島・奥尻島・渡島大島・渡島小島を描く。「勤番所・運上屋」「運上屋」「漁場」「泊」の位置と名称、陸・山・海路、「ナンバ（難場か）」の位置が記入される。相対的な位置関係は概ね正確だが、陸地の形状や大きさは不正確。「封内全図」との記載があるため、松前藩が自藩の管轄下にあると捉えていた地域が本図に示されていると考えられる。【図14・図15】は同一の包紙に包まれる。

【図15】「福山城辺図」(183)

二七・七cm×八一・五cm

渡島半島から見た渡島半島南端部の海岸線および津軽海峡と本州北端を描く。本州北端については渡島半島側から見える地形を簡単に示すだけである。渡島半島側は海岸線とその後背部を中心に描かれるが、台場や建物、磯の位置を示すとともに、「磁石」・「測量跡」との説明のある朱点や朱線も記入されており、測量に基づいて作成された地図であることがわかる。

【図16】「ロシア船旗図」(374)

二七・六cm×四〇・五cm

嘉永七年（一八五四）に樺太南岸のクシニコタンに來航したロシア船の旗図。前年の嘉永六年九月にロシア船がクシニコタンに來航し、翌七年五月の撤退まで陸上に駐屯した。本図では、七年五月十日・十二日・十四日・十五日に來航した四艘それぞれの旗が示される。十日と十五日に來航した船の旗はロシア帝国の国旗で、上から白・紺・赤の三色で、上段中央に双頭の鳥と記される。十二日・十四日に來航した船の旗は、白地に紺色で×形の線が引かれたものであり、これはロシアの海軍旗である。

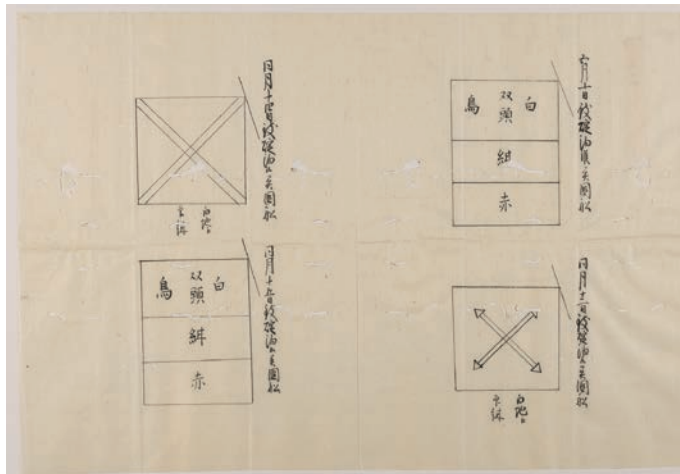


図16 「ロシア船旗図」

【図17】「クシニコタン地図」(379)

二八・一cm×四〇・五cm

嘉永六年からのロシア船のクシニコタン來航時の様子を描く。簡略化した地形とともに、勤番所・運上屋・蔵・居小屋や台場の位置が簡単に示される。ロシア兵は大砲・建築資材・食料などとともに上陸し、哨所を建設した。この哨所は銃眼のある柵を持つ堡壘だった。本図でも朱字で「異国人共鉄砲置場二見立」、「異国人共大筒置場二見立」、「此辺、居小家二見立」などの記述がある。



図17 「クシニコタン地図」



図18 「尼崎城下に異船着の図」

○その他

【図18】「尼崎城下に異船着の図」(30) 三八・四cm×五四・五cm

嘉永七年(一八五四)九月にプチャーチンが乗ったロシア艦ディアナ号が尼崎に來航した際の図。海岸部の新田の直近にロシア艦が停泊していた様子を描く(図中には、城下町からロシア艦まで、「凡八丁程」と記述される)。



図19 「阿蘭陀本国船図」

【図19】「阿蘭陀本国船図」(40) 三〇・八cm×四二・〇cm

オランダ船來航時の長崎の様子を描く。オランダ船は、長さ三八間余・幅七間余、石火矢三六挺、乗員三二〇人と記述される。いつの來航を描いているかは記述されないが、「当辰年」との表記がある。安政三年(一八五六)に來航したオランダ船は蒸氣船であり、本図に描かれるのは帆船なので、弘化元年(一八四四)の來航時の様子かと推測される。

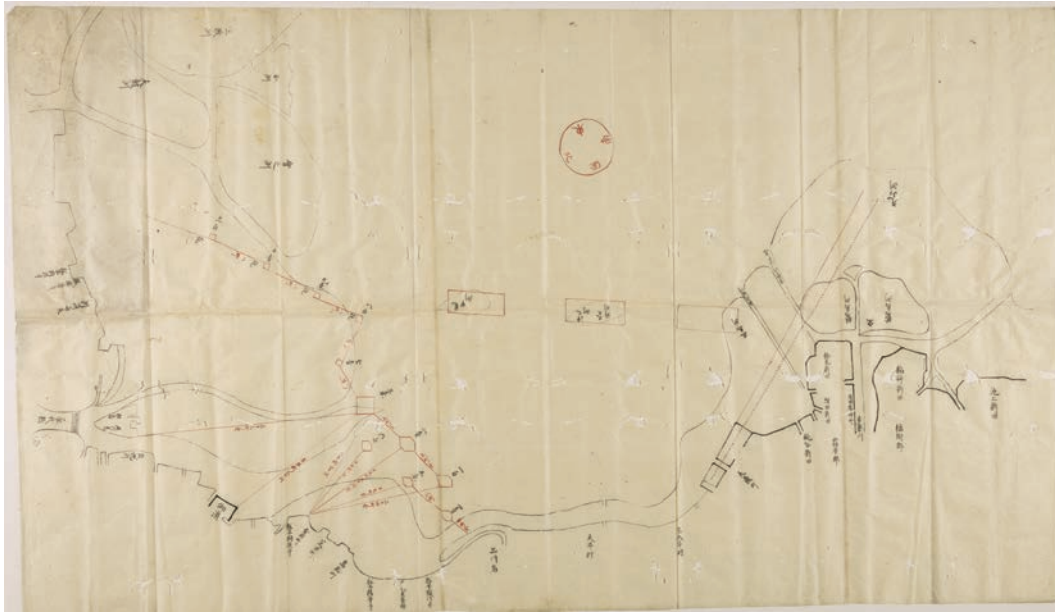
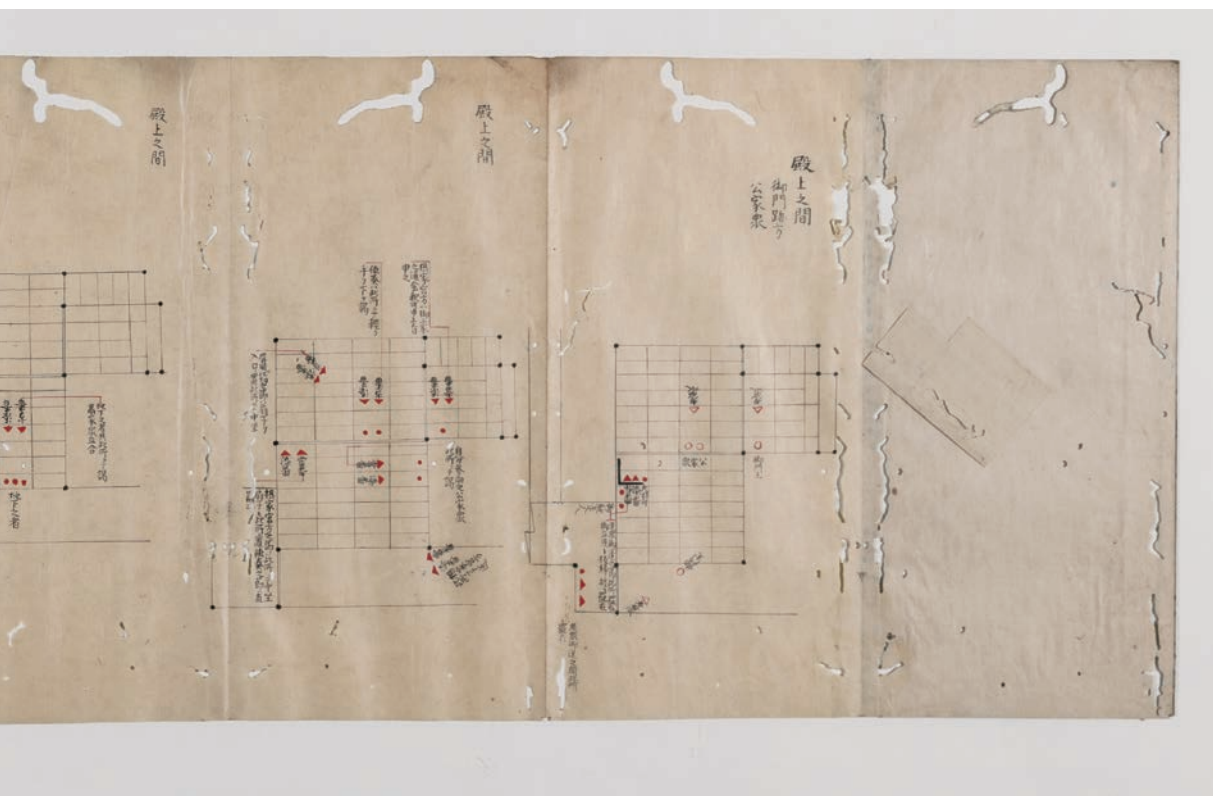


図20 「御台場位置図」

【図20】「御台場位置図」(41) 三九・四cm×六八・〇cm

ペリー来航後に江戸湾に建設された台場の位置を示す図。実際には建設されなかったものも含め、一一個の台場が記されており、計画段階での図面とわかる。



【図21】「西丸席図 乾」(357) 一六・五cm×一六二・〇cm (折本)

「西丸席図 乾」(358) 一六・五cm×二七二・〇cm (折本)

江戸城西丸での儀式の際の図面。勅使・琉球使節・オランダ使節・御三家・外様大名などが登城した際の老中の着座位置などを示す。

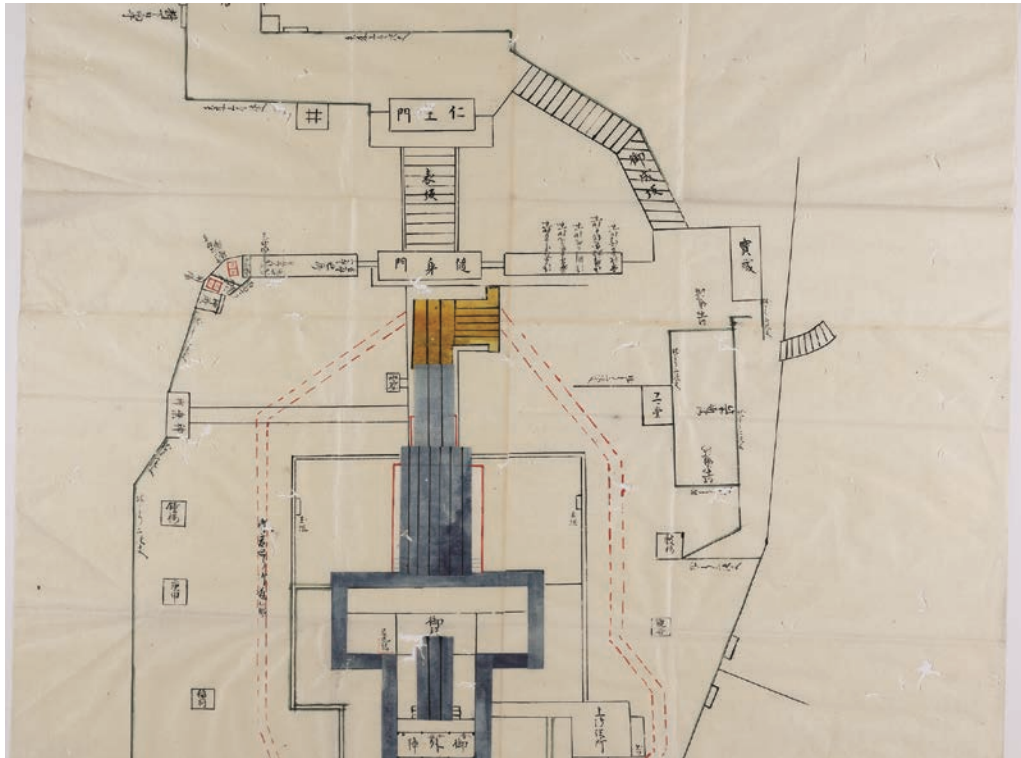


図 22 「東照宮図」(部分)

【図 22】「東照宮図」(369) 五四・六 cm × 九三・七 cm
史料名は「東照宮図」となっているが、実際には山王権現(日枝神社)を描く。老中・若年寄・側衆・御用部屋坊主・寺社奉行の控え場所などが記されており、將軍社参時の様子を描いたものと考えられる。

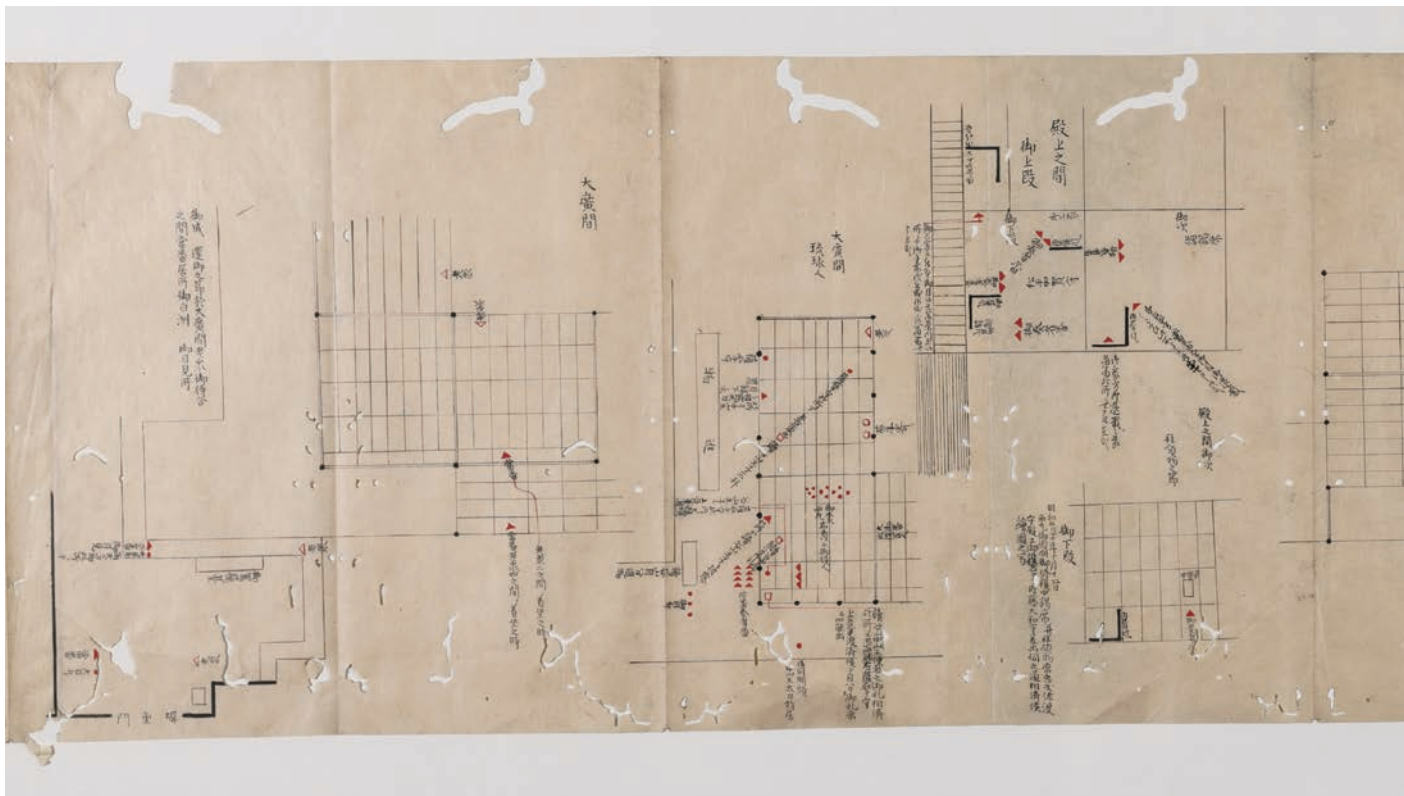


図 21 「西丸席図 乾」(部分)

【図23】「水戸邸と上野中堂の図」(268)

二四・五cm×三三・五cm、二四・五cm×一六・七cm

一枚目は水戸藩中屋敷から寛永寺あたりまでを範囲とする図で、二枚目は水戸藩中屋敷の一部分（後述の徳川斉昭が謹慎していた建物の周辺）を拡大した図。

両図は一つの包紙に包まれており、その包紙は「鹿絵図 二枚」「松平豊前守差出候絵図」との記述がある。松平豊前守とは丹波亀山藩主松平信義で

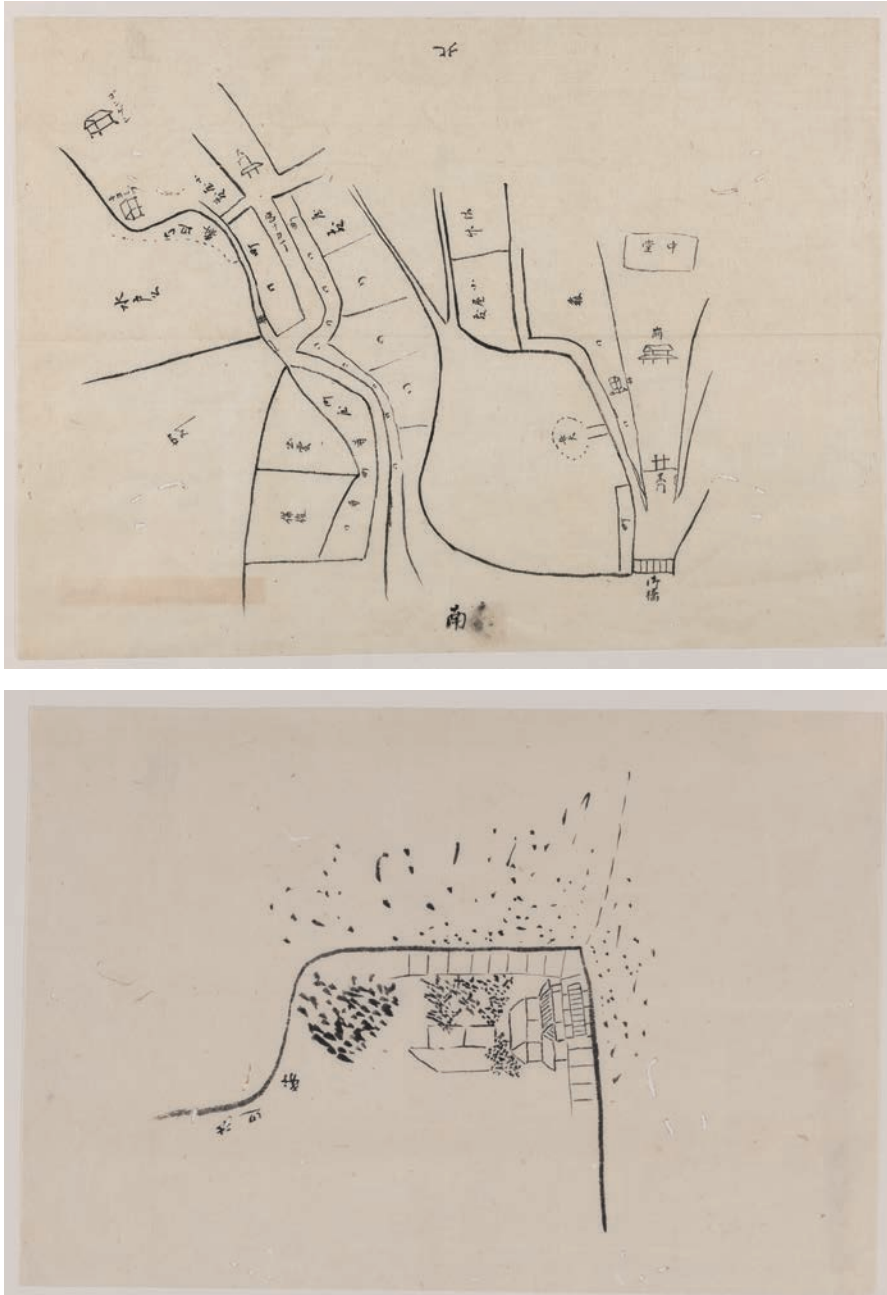


図23 「水戸邸と上野中堂の図」

あり、同松平家は井伊直弼正室の生家にあたる。包紙中には、両図とともに、安政五年（一八五八）八月に町方掛の徒目付・小人目付が差し出した書付も包まれる。書付の内容は、水戸藩の前藩主である徳川斉昭が謹慎している水戸藩中屋敷と上野方面の地理関係であり、斉昭が謹慎する建物の三階から、寛永寺内の文殊楼や中堂・清水観音堂・山王社や黒門までの往来がどの程度見えるのか、というものである。南紀派に属する乗全が、政敵斉昭の情報を収集していたことを示す。

註

- (1) 宮地正人『幕末維新期の文化と情報』（名著刊行会、一九九四年）、荒木裕行『近世中後期の藩と幕府』（東京大学出版会、二〇一七年）。
- (2) 『近世中後期の藩と幕府』。
- (3) 本図は、『新修大坂市史資料編』第六卷（大坂市、二〇〇七年）、四三一頁に収載。
- (4) 本図は、『新修大坂市史資料編』第六卷、四一八頁に収載。
- (5) 『函館市史』通説編第二卷（函館市、一九九〇年）。
- (6) 『函館市史』通説編第二卷。
- (7) 秋月俊幸「嘉永年間ロシアの久春古丹占拠」（『スラヴ研究』十九、一九七四年）。
- (8) 十四日来航船の旗の紺色線は本来のロシア海軍旗と同じく単純な×形であり、十二日来航船のものは矢印の形状と記されるが、単なる書き間違いかどうかは不明。
- (9) 秋月俊幸「嘉永年間ロシアの久春古丹占拠」。
- (10) この時、松平乗全は寺社奉行。